

F・ブリンクリーによる福沢諭吉「修身要領」の英訳と日英博覧会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2016-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤木, 智恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18267

F・ブリンクリーによる福沢諭吉「修身要領」の 英訳と日英博覧会

The Fukuzawa's Moral Code Translated by F・Brinkley and Japan-British Exhibition of 1910

博士後期課程 教養デザイン研究科 2010年度入学

澤 木 智 恵 子

SAWAKI Chieko

【論文要旨】

本論文は、福沢諭吉が明治後期に道徳の新概念を説いた「修身要領」をフランシス・ブリンクリー (Francis Brinkley 1841-1912) が英語に翻訳したことと、その英訳を慶應義塾大学が日英博覧会に出品したことを明らかにするものである。1910 (明治43) 年、ロンドンで開催された日英博覧会 (5月14日-10月29日) を記念して発行された『タイムズ (The Times)』の「日本特集号」(7月19日) に健筆をふるったF・ブリンクリーは一方で、同博に出品された福沢諭吉「修身要領」を翻訳していた。「修身要領」は個人尊重の理念「独立自尊」を中心にすえて論じられた新道徳律である。それは脱亜入欧の流れをうけており、イギリス人のブリンクリーにとっては常識的な概念といえる。ところが、彼と福沢諭吉には強い確執が伝えられている。そこで、福沢諭吉著作の翻訳にかかわる経緯を探るとともに、近代国家構築へ邁進する明治時代に、忠孝道徳という封建思想に対し、「独立自尊」の近代思想を掲げた福沢諭吉の「修身要領」英訳の意義についても考察する。

【キーワード】 F・ブリンクリー, 福沢諭吉, 「修身要領」英訳, 『英語青年』, 日英博覧会

はじめに

F・ブリンクリー^①は『タイムズ (日本特集号)』の執筆以外にも日英博覧会に関わる仕事を行っていた。慶應義塾の創業者、福沢諭吉 (1834-1901) の「修身要領」の英文翻訳である。その全文 (原文・訳文) は、日英博覧会が開催された1910 (明治43) 年に発行された雑誌『英語青年』^②の第22巻第7号 (1月1日) と同巻第8号 (1月15日) に掲載されている。日英博覧会開催に先立つこと4

か月前の発行である。雑誌の編集・印刷から発行までの編集工程を入れれば、少なくともその前年の秋頃には、プリンクリーは翻訳を終えていたものと推測される。

『英語青年』掲載の題名は「FUKUZAWA'S MORAL CODE. 福澤翁の修身要領」、翻訳者名は「Translated by Captain Brinkley」と書かれ、以下のかんたんな序文が添えられている。

これは慶應義塾大学より本年英國に開催の日英博覧會へ福澤先生の修身要領を出品するに就き、Japan Mailの主筆プリンクリ氏が昨年末同大學の為に譯したるもの⁽³⁾。

慶應義塾大学が日英博覧會に「修身要領」を出品するにあたり、プリンクリーがその翻訳を担当したというのである。「依頼」という文字は使われていないが、慶應義塾に「修身要領」を翻訳・出品する意向がなければ実現しえないことであり、その決定権は当然ながら慶應側にあることを思えば、文意としてそう受け取ってまちがいないだろう。

プリンクリーが「修身要領」を翻訳した時期を勘案すると、1910年5月開催の日英博覧會出展に合わせ、その半年前から1年前を着手期間と見積もってさほどの誤差はないと思われる。このころプリンクリーは68歳であり、亡くなる3年前に「修身要領」の翻訳を手掛けたことになる。当時、彼は『ジャパン・メール (*The Japan Mail*)』の社主兼主筆の仕事に加えて、日英博覧會に向けて発行予定のロンドンの『タイムズ (日本特集号)』の編集・執筆に取り組んでいたことは、拙稿「F・プリンクリーと日英博覧會」⁽⁴⁾において明らかにした。ジャーナリストとしての日頃に輪をかけた忙しさ、しかも持病⁽⁵⁾をもつ万全とはいえない体調で、常識的には自ら慶應義塾に「修身要領」の翻訳を申し出たとは考えにくい。しかし、彼が日英博覧會に関わるなかで明治日本の現代思想として、日本を代表する教育思想家、福沢諭吉の「独立自尊」の道德律を西欧に紹介すべきものと考え、自ら英訳を提案したということは考えられうる。その根拠としては、福沢諭吉とプリンクリーの関係について考察する渡辺俊一 (福沢諭吉協会会員) の論文にみることができる。

I プリンクリーと福沢諭吉の関係

1. 二人の確執

渡辺俊一は二人の関係について、「福沢諭吉とプリンクリー—「開鎖論」を中心に—」⁽⁶⁾と、同名論文の続編「その二」に詳しく論述している。渡辺は前著において、プリンクリーの福沢への貢献度について次のように言及する。

プリンクリーは思想家としての福沢諭吉を高く評価して、公刊間もない『時事小言』をメイル紙上に翻訳掲載するなど、福沢の文章を海外への紹介に大きな役割を果たした。(p.25) (略)

メイルは海外で広く読まれ、日本関係の優れた情報源として重視されていたので、メイルに掲載されることは、広く海外に紹介されることであった。(略) プリンクリーは福沢の海外に

おける名声の獲得に協力していたと言える。(p.45)

プリンクリーに対する福沢諭吉の反応はといえば対照的で、プリンクリーの好意に対しては完全なる無視で応えた。その理由を、渡辺は「明治十四年の政変⁷⁾にあった」とみている。渡辺の論文「明治十四年政変再考—井上毅と福沢諭吉」⁸⁾によれば、明治14年の政変を背景にしたプリンクリーの急変が、福沢の態度を硬化させたというのである。

それは、明治14年の政変が、「大隈が提出した立憲制に関する意見書は、実際は福沢の手によるものであり、(略)政権を狙ったものであると中傷したことから始まった政治事件であった」⁹⁾ことが起因している。プリンクリーは中傷を信じて、福沢批判に転じる。この突然の変身を「伊藤博文の意向を受けた攻撃」と受けとった福沢は、プリンクリーに消し難い敵意を持つにいたったという。確執は解消されず、二人は和解せず、終生、友好関係を結ぶことはなかった¹⁰⁾。

福沢諭吉は日英博覧会開催の9年前の1901(明治34)年2月3日に没している。十年一昔の歳月がプリンクリーを福沢に歩み寄せ、「修身要領」翻訳の労をとる気にさせたのだろうか。プリンクリー自らが翻訳を申し出たのか、慶應サイドから持ち込まれたのかを決定づける資料は見つからないが、いずれにせよプリンクリーの意思が働かなければ翻訳は実現しないのは確かである。

2. ジャーナリストとしての矜持

では、プリンクリーはどのような考え方をする人物なのか。公私ともに親交が深かったひとりの在日外国人が書いたプリンクリー追悼記事より紹介しよう。

1912(明治45)年10月30日、神戸居留地の英字新聞『ジャパン・クロニクル(*The Japan Chronicle*)』は、プリンクリーの生涯と業績を網羅した追悼記事を掲載した¹¹⁾。筆者の名は「ヒストリカス(Historicus)。「プリンクリーとは31年間の知己である」と紹介される。昭和女子大近代文学研究室による詳伝「F・プリンクリ」¹²⁾によれば、「ヒストリカス」はウォルター・デニング(Walter Denning・1853-1913)のペンネームである。デニングは横浜居留地発行の英字新聞『ガゼット(*The Gazette*)』の主筆をつとめ、『ジャパン・メール』への寄稿も多く、プリンクリーと親交が深かった。追悼記事では、同業者として具体的で説得力のあるプリンクリー論を展開している。なかでも「第3章・新聞の編集者および記者としてのキャプテン・プリンクリー」(p.5)の2つの記述に注目したい。

まず、冒頭に書かれている『ジャパン・メール』編集権を入手直後のこと、プリンクリーはこの新聞を「一人のための機関誌にしないことを決め、10年から12年の間、新聞の論説欄を寄稿記事で飾りつづけた」。それは大反響をよび、記事の執筆者の学者の意見が読者投稿のテーマとなって、日本中から手紙が殺到した。ことに「シリーズ・宗教と大和魂」では、大学教授や一流の宣教師はもちろんのこと、一般人も多く加わり、はげしい論争が繰り広げられた。5か月後の1884(明治17)年11月11日付け同紙に、編集責任者のプリンクリーは次の文章を載せ、論争の幕を閉じた。

この論争がたどった経過について、われわれは相当な落胆を覚えたと言わざるを得ない。そんなテーマにはなりそうにもない性質の要素が次々取り込まれて、まずい具合に当てはめられ、論客たちが望んでいる言い分を押し進めてしまったのだと思う。

デニングは、この文章について、「キャプテン・プリンクリーは慎重であり、どちらの側に付くことも避けていたことがわかるだろう。彼は元の記事を擁護することも、記事に対して行われた攻撃に応酬することもなかった」と評し、プリンクリーの編集姿勢の中立性、公平性に言及した。次いでデニングは、プリンクリーのぶれることのない一貫した編集ポリシーについて解説する。

彼が編集者として公正であったことについていえば、ジャパン・メールの編集を始めた日から亡くなる日まで、新聞コラムの寄稿記事のほとんどはキャプテン・プリンクリーの意見を反映しておらず、ときにはむしろ彼の意見を激しく非難していた、ということに注目することが重要である。これらの記事に対して、彼はほぼ30年の間⁹³快く原稿料を払ってきた。

ここ17年間は2か月に1回の頻度で日本文学概論が掲載されてきた。そこには彼が強く異議をとる文章も含まれていた。しかし、概論の筆者たちに対しては、日本人の思想傾向を示す貴重な意見であると好印象をもっていた。

以上のようにデニングは具体例をあげて、プリンクリーの報道・編集の姿勢は客観性を重んじるジャーナリスト精神に裏打ちされていると解説した。さらに、『ジャパン・ウィークリー・メール』の同年11月2日号(p.516)では、「彼〔プリンクリー〕が編集者として大変リベラルな精神をもっていると、いつも感じられた」と評価する。これらの記述を読むと、プリンクリーは感情的わだかまりに固執して公私を混同するタイプとは対極である。つまり、「修身要領」の価値を認めたならば、相手が反目する福沢諭吉であっても、私情を交えずに良いものは良いと世界に紹介する労をとるのを厭わない、ジャーナリストとしての矜持をもつ人間であったことが類推される。福沢の道德律「修身要領」を日英博覧会会場に出典して西欧に紹介するにふさわしいと判断した。そう考えたうえでプリンクリーの翻訳だったと考えられるのではないだろうか。

では、最晩年の福沢が著した「修身要領」を、西欧に紹介するにふさわしい道德律であるとプリンクリーが判断したとすれば、彼はどこにその価値を見出したのだろうか。

II 「修身要領」制作の経緯と思想の核心

1. 封建思想から近代思想への転換

1898(明治31)年9月、福沢諭吉は脳梗塞に倒れ、一時は重態であったが、約3か月後に回復した。しかし、回復はしたもののほとんど執筆できない状態がつづいていた。翌年末、高弟をよびよせ、「旧思想旧道徳は力を失ったが、新道徳の教えは未だ世に現れていないのでこの際、人心を指

導すべき徳教の標準を示す“修身処世の綱領”の案を作成するよう諮った」⁴⁾。

呼び寄せられた小幡篤次郎、福沢一太郎、鎌田栄吉らの高弟たちがさっそく協議を重ね、福沢論吉の平素の言行に基づいて20数か条の草案を作成し、福沢の閲覧を仰いだ。そして完成したのが、29か条からなる「修身要領」である。これを貫く思想は「独立自尊」であり、半分を超える17か条にこの言葉が使われている。これ以前に福沢が「独立自尊」の4文字をつかったことはあまりなかった。しかし、福沢をもっともよく知る小幡が標語に選び、「先生の日ごろの言行を表すのに、これよりふさわしい言葉はないとして、多くの賛同を得た」⁵⁾。

「修身要領」は1900（明治33）年の紀元節（2月11日）にまとめられ、同月24日の三田演説会で発表され、翌25日には時事新報（p.2）にも掲載された。なお、同日の東京朝日新聞（p.1）には、全箇条が要約で掲載された。

ところで、日本の「旧思想・旧道徳」といえば、第一に頭に浮かぶのは「忠孝」の思想であり、「滅私奉公」の道徳観である。人々を縛り付けた身分階級制度がまがりなりにも取り払われた明治期、それに代わる思想として福沢が提示したのが、「独立自尊」という個人の自主性を重んじる思想であった。滅私奉公とは対極の個人尊重思想であり、近代西洋思想の真髄ともいえるものである。

日本資本主義の父といわれる実業家、渋沢栄一⁶⁾は「余の独立自尊観」⁷⁾において、明治初年という時代を「人々が古い慣習を脱せず、一体に独立の気性に乏しく、個人思想や個人主義の発達する英国などに比べると、その差はただならないものがあつた」と書いている。そして、「この迷走の時代において、（福沢）先生が大いに個人の力の尊ぶべきこと、個人の権力の重んずべきことを説かれたのは真に最も時期を得たもので、先生の明智にあらずんば、容易にこれを喝破し難かつたのである」と、独立自尊の思想を主張した福沢の卓見を高く評価している。

2. 「修身要領」と独立自尊

「修身要領」の内容を具体的にみてみよう。

まずは「第一」に、「わが党の男女は独立自尊の主義を以て修身処世の要領となし、これを服膺して人たるの本文を全う可べきものなり」と述べている。以下「第四」をのぞき「第五」から「第十七」までに「独立自尊」の四文字が登場する。それは、精神論、男女関係、子女の教育、社会生活の原理におよぶ。このあと「第二十二」「第二十六」では国家に言及し文明論へと展開する。最後に登場する「独立自尊」は、教育の重要性のためにさかれている。

男女平等という人権の視点から教育をみれば、慶應義塾はこの時代、まだ女子学生を受け入れていないが、「第八」では正面きって男女平等を唱えている。「男尊女卑は野蛮の陋習なり。文明の男女は同等同位、互に相敬愛して各その独立自尊を全からしむ可し」というように。つぎの「第九」でも「一夫一婦制（略）独立自尊を犯さざるは人倫の始めなり」と、社会的道徳の始めとして、男も女も対等に独立自尊に則ることを推奨する。

また、「第十五」では、独立自尊の言葉はつかわれないものの、「怨を構え、仇を報ずるは野蛮の

陋習にして卑劣の行為なり」と、封建社会では美德とされた仇討が忠孝の思想を離れて、醜い復讐の行為として禁じられている。男女を平等に尊重する考え方など、当時の人々は180度の価値観の転換にとまどったものと推察される。「第二十六」では、「各その宗教言葉習俗を殊にすといえども、其国人は等しくこれ同類の人間なれば、(略) 他国人を蔑視するは独立自尊の旨に反するものなり」と人種や宗教・文化などの差別が諫められる。

目を転じれば、その頃日本は一等国入りを目指して奮闘する新興国家であった。日本人向けに作成された「修身要領」ではあるが、世界に通じるこの正論をもって先進国に対抗すべしとの思いも込められていたようだ。西洋に追いつけ追い越せと励む日本を上から目線で見下すように応対する欧米諸国、欧米人への対抗意識が見え隠れするような論調である。

だれの眼にも西洋思想への傾倒があきらかなこの新道徳論は、「脱亜入欧」を唱えた福沢諭吉らしい内容であり、西洋の考え方に不慣れな日本人には斬新かつ刺激的な文明開化の処世訓でもあった。明治民法の家族制度における戸主権の支配下にあつて、長男以外の家族・個々人の意思が発揮できない日本の社会。この人権無視の状態が、前述の渋沢栄一の「独立の気性が乏しく、個人思想や個人主義の発達」が損なわれているという言葉につながっていることは否めない。英国留学や国際舞台で活躍した渋沢だからこそ比較・検証し、実感できる杞憂であったと考えられる。

ところが、英国国教会に所属するプロテスタントであり、40数年もの長きを日本に暮らすプリンクリーは、渋沢が嘆いたような日本人への言葉を残していない。プリンクリーに、日本の政界や政治家に対するシニカルな感想や¹⁸⁾、神話の子孫を天皇と信じる非科学性を突く文章¹⁹⁾はあるが、それ以外の表現では日本人は“褒められすぎ”の感じがするほどだ²⁰⁾。プリンクリーが日本に関心を持ったきっかけは長崎で見た武士の果し合ひであった²¹⁾。この果し合ひで目撃した武士道の礼節に感動をうけ、日本滞在を決めたといっても過言ではない。そして、日本人の質実剛健さと高い美意識を敬愛して、日本を世界に紹介することに骨身を惜しまぬ生涯を送った。1867（慶応3）年に来日し、以来1912（大正元）年に死去するまで、母国イギリスへも帰らず、南京条約締結の特使・伊藤博文に同行し北京へおもむいた以外は海外へ行くことなく、45年間を日本に暮らした。まさに、福沢諭吉とは反対の“入亜脱欧”の人であった。そのプリンクリーが「修身要領」を翻訳した狙いは、まず、欧米人に対し西欧化された新道徳論を、開国以来の日本人の意識変革としてアピールできることだろう。「日本の擁護者」²²⁾といわれた彼らしい思い入れがあるように感じる。つぎに英語テキストとして活用されることで、性・年齢、身分・地位、人種、宗教などの違いにかかわらず、もっとも尊重されるべきは個々の人間としての権利であると国内外に訴えることができること。プリンクリーが「修身要領」の英文翻訳に見出した価値は以上のようなものであったと考える。

III プリンクリー訳と畑功訳

プリンクリーが「修身要領」の英文翻訳に至った経緯を知りたいと、慶應義塾大学にコンタクトをとった。2014年3月14日、電子メールにて「修身要領」のプリンクリー英訳と日英博覧会への

出展に関する経緯、および資料や研究書の有無などについて問い合わせた。同年3月21日、同塾福沢研究センターよりの返信は、フランシス・プリnkリーの「修身要領」英訳そのものも、英訳に関する資料も所蔵していない、という回答だった。ただし参考情報として、1907（明治40）年頃に畑功が翻訳をしたといわれている「修身要領」の英訳が存在し、慶應義塾ではその英訳を印刷して使用していたようだ、との但し書きとともに、2つの参考情報が送られてきた。それは畑功の「修身要領」英訳の一部と、『慶應義塾百年史』²³⁾に載る同英訳文に関する記述である。

畑功の翻訳の冒頭を、プリnkリー訳と比べてみたところ、それらは同文といえるものであった。違っていたのは、「man」（プリnkリー）が「Man」（畑）に、「independence」と「self-respect」の出だしの「I」と「S」が畑功訳では大文字表記になっているところだけであった。

また、『慶應義塾百年史』の同英訳文についての記述は以下のようであった。

大正十二年から普通部、商工学校の高学年では「修身要領」の全文に注釈と英文訳を付したものを、大学予科一年では英訳『Fukuzawa's Moral Code』を使った。この英訳文は明治四十年ごろ文学科教員畑功が訳し、同プレフェーヤ（Alfred William Playfair）（明治三十九年九月着任、大正六年死去）が加筆したといわれているもので、最初は一枚に印刷されたが、大正十二年慶應義塾出版局から小冊子として初版を出し、毎年版を重ねて、昭和五年の重版をもって終っており、昭和八—九年ごろまで使用されたようである。（p.474）

「修身要領」のプリnkリー訳（『英語青年』掲載）と畑功訳の全文（原文と訳文）を比較し、検証した。比較に用いた慶應義塾関係出版物の英訳は、①『慶應義塾學報』第150号（1910年1月15日）²⁴⁾ ②『福澤文選』²⁵⁾ ③*Fukuzawa Yukiti on Education Selected Works*（教育における福澤諭吉の仕事選）²⁶⁾の3冊に掲載されたものである。句読点の違いや表記の統一性を欠くものは除き、相違点を比べたところ、結果は、『英語青年』と慶應義塾関係の本3冊における翻訳文とは、以下を除いてほとんど同じであった。

- 1) 後者3冊の、大文字表記の出だしは、「Independence」「Self-respect」以外に、「Man」「Mind and Body」「Principle」「Cultivation of the Moral Character」「Dark Ages」「Province of Education」「Society」など。
- 2) 異なる単語を使っている個所は2か所。『英語青年』では、「序文」中ほどの「such conduct in regulated」の「in」が、後者3冊では「is」である。また同様に「6.」の「courage with fortitude.」は、後者2冊は「with」が「and」である。
- 3) 『英語青年』と『慶應義塾學報』『福澤文選』は「to-day」を使用しているが、発行年の新しい*Fukuzawa Yukiti on Education*では、「today」とハイフンが削られている。
- 4) 『英語青年』の one of the highest of human virtues の「highest of」は、後者3冊には書かれていない。

以上、検証の結論は、慶應義塾においてテキストとして使われていた畑功が英訳した「修身要領」は、『英語青年』誌上のプリンクリー訳と瓜二つだったのである。

1. 畑功、プレフェーヤの経歴

では、畑功とはどんな人物なのか。

『慶應義塾百年史』⁶⁷⁾によれば、明治26(1893)年渡米。シカゴ大学、ハーバード大学、エール大学らに学び、1904(明治37)年—1941(昭和16)年まで英文学、修辞学を教え、「かたわら英語会の指導に当たり、学生のため多くの英文脚本等を記して英語会の指導に熱心であった」と紹介されている。1943(昭和18)年11月に教育実践上の功績について義塾学事振興資金による表彰を受け、翌12月、37年つとめた慶應義塾大学を退職。翌年、名誉教授になる。退職後、郷里福岡の久留米大学で英語を教える。1956(昭和31)年11月26日、川崎市の自宅で死去。享年81歳11か月⁶⁸⁾。

これ以外の経歴を他の出版物⁶⁹⁾にあたると、1874(明治7)年12月、福岡県築上郡下城井村(現・築上郡築上町)に生まれ育った。福沢諭吉の郷里中津とは川一本はさんで隣り合う近さであり、福沢の影響をうけたことはいなめない。福岡県立豊津中学校(現・福岡県立育徳館高等学校)を卒業後、1893(明治26)年19歳で単身渡米、自活しながら各地の大学で英文学を修得する。留学遍歴はテネシー州のナッシュビル大学に始まり、「マスター・オブ・アーツ(エール)、バachelor・オブ・レターズ(ナッシュビル)」⁶⁹⁾を取得。すなわち、エール大学の修士号とナッシュビル大学の学士号をもつ。そして、1903年(明治38)年エール大学を卒業後、帰国。翌年、30歳で慶應大学教授に就任。いかにも明治の青年らしい青雲の志をたてた渡米は、10年後に見事な実を結んだのである。ただ、残念なことに福沢諭吉は3年前の2月に鬼籍に入り、畑が対面することはできなかった。

また、英訳文を加筆したとされるプレフェーヤは⁶⁹⁾、カナダ・クイーンズ大学の出身で、マスター・オブ・アーツ(修士号)をもつ。1905(明治38)年に来朝。東京高等師範学校、東京帝国大学文科大学等に招かれて英文学を講じ、慶應義塾では1906(明治39)年9月—1917(大正6年)年12月の間、英文学、修辞学等を教えた。「学殖きわめて深く、その博覧強記は教員間のいかなる疑問も立ちどころに解決し、ために『大審院』のあだ名をもって称されたと伝えられる」が、1917年12月に45歳の若さで急逝。彼を惜しんで翌年2月の『三田文学』⁶⁹⁾では追悼特集が組まれた。教え子たちの回想は、カナダの元騎兵大尉・プレフェーヤの博覧強記のエピソードとともに、寡黙で温厚だが皮肉屋の一面をもつ、孤独を好んだなど人間的描写におよび、思慕の情にあふれていた。

若くしてアメリカへ留学、複数の一流大学で学び、慶應義塾大学に39年間つとめた畑功、慶應義塾、東京帝大に教鞭をとったプレフェーヤ、ともに多彩な経歴である。片やプリンクリーも彼らに伍して劣らぬ実績をもち、最晩年には母校トリニティ・カレッジ(ダブリン)から法学博士号授与の申し出を受けていた⁶⁹⁾。病身のためダブリンへの渡航ができず、学位を得ることは叶わなかったが、彼の日本における仕事の業績が評価されての博士号であったことはまちがいない。

今回取り上げた「修身要領」の英訳文は、畑功が翻訳してプレフェーヤが加筆したのか、プリン

クリーが翻訳したのか。現在、その判定を下す確固たる証拠資料はない。しかし、以下の理由により、私はプリンクリーが訳したと考える。根拠とするのは、3人が手がけた著作物である。

2. プリンクリーと畑功の著作の比較

プリンクリーの著作物からみてみよう。

最初の著書は来日4年目の1871（明治4）年発行の『英国銃隊練法—1870年式』、英国大砲隊指揮官として津藩から依頼されたものと思われる。外国を日本に紹介した本はこれ一冊である。以後はすべて、日本に関する事物を英語で記した外国向けの日本紹介の著書となる。

特筆すべきは、日本に関する1冊目が、日本とイギリスの言葉を集め、読み方、意味、語源、用例などを解説した語学の基礎となる辞書であることだ。翻訳をおこなう上で欠かせない書籍である。異なる母国語をもつ国民たちが互いを理解し、交流を深める絆となる書物をプリンクリーは改訂版も含め3冊出版している。まず、日本人向けの英語入門書、『語学獨案内』⁶⁴、南条文雄、岩崎行親らとの共著『和英大辞典』⁶⁵、さらに大幅に改定した『新語学獨案内』⁶⁶を刊行する。

つぎに、日本を取り上げた主な著作物をあげよう。1897（明治30）年から2年間かけて『日本』⁶⁷10巻を刊行。同書は、日本画、木版画、刺繍画、彩色写真などの貼られた豪華本である。1901（明治34）年から翌年にかけては、歴史と美術、文学を取り上げた叢書『日本と中国』⁶⁸12巻を出版。つづいて1904（明治37）年発行の『ブリタニカ大百科事典』9版29巻の「Japan」の項を執筆している。4年後の1908（明治41）年には、『シリーズ歴史家の歴史』⁶⁹24巻の3～5章の「日本と中国の歴史」を執筆。そして、発行は死後の1915年（大正4）年になってしまったが、730ページという大書、『日本民族史』⁷⁰を手掛けている。副題に「古代より明治末期まで」とあるように、日本の起源から明治末期までを、天皇の変遷、地理、政治経済、外交、美術、文学、風俗習慣と関するあらゆるテーマを網羅し系統だててまとめた、プリンクリーの日本紹介の集大成といえる一冊である。もちいた文献は、『古事記』『日本書紀』『大鏡』『神皇正統記』『今昔物語』『靈異記』『聖徳太子記』『太平記』『竹取物語』『徒然草』『太閤記』『折りたく柴の記』『武士道』『大日本史』など日本の古典籍が153冊にのぼる。単行本になっていないが、プリンクリーは、*The Times of Taiko*（太閤の時代）、*The Times of Taira*（平家の時代）の2本の日本の歴史読み物を書いている。「太閤の時代」は掲載紙が未確認だが、「平家の時代」はプリンクリーが『ジャパン・メール』の経営権を取得する以前の同紙に、1879（明治12）年7月12日—1880（明治30）年5月1日まで週1回、通算124回の連載をしている。その序文にも文献として『義経記』『源平盛衰記』『平家物語』など日本の古典籍12冊が記載される。このとき、来日12年目、38歳。プリンクリーは日本を知るにあたって通り一辺ではなく、本質をつかみ、深く理解したいと古典に遡って本格的な勉強をしていたことがうかがえる。プリンクリーが「ジャパノロジスト（日本学者）」と呼ばれるゆえんである⁷¹。

一方、畑功の著作物にはプリンクリーと異なり、日本・日本人について英文で執筆したものは見

当たらない。彼の著書は、日本語で書かれた随筆集『隨筆 變物集』⁽⁴³⁾以外はほとんどが外国人作家の文章を転載した英語テキスト、または英語の手引書である⁽⁴⁴⁾。畑は梗概や解説、あとがきを日本語の文章で綴っている。また、雑誌などに掲載された著作も同様で西洋の史実やアメリカの校長の教育論を日本語訳したものはあるが⁽⁴⁵⁾、日本の歴史、文化、伝統、思想・信条、宗教、美術など日本の事象に関する英文の著作は探し出せなかった。これらの実績から畑が志しているのは西洋の文化や歴史、ものの見方考え方を日本に紹介し学生を教育することであり、日本を西洋に紹介したプリンクリーの指向とは反対の方向のようにみえる。事実、畑は英語教育に大変熱心であり、慶應義塾英語会の会長を長年務め、英語劇の脚本を自ら創作するなど英語の実践教育に尽力している。その功績が認められ、前述（本稿 p.8）のごとく、彼は退職前月に「義塾学事振興資金による表彰を受け」、翌19年には名誉教授の称号を贈られている。1952（昭和30）年、78歳の畑を英語学者の宮本與作が訪ね、「畑功先生會見記」⁽⁴⁶⁾を書いた。当時は九州の太宰府に住み、久留米大学で学生に英語を教えていた。駅まで宮本を出迎え、英語修行の時代を語らいながら歩く描写は、高齢の畑の矍鑠たる姿と気さくな人柄を彷彿とさせる。畑の死に際して、教え子の厨川文夫慶大教授が寄せた追悼文「畑先生を想う」⁽⁴⁷⁾に「いい先生だった」と偲ばれているのも印象的である。

また、プレフェーヤは、『三田文学』の追悼文を読む限りにおいては、日本語を介しての会話は登場せず、プリンクリーのように日本語に通曉していたとは思えない。なお、彼の著作に、*Exercise in Paraphrasing Sentence, Structure, and Composition*.⁽⁴⁸⁾がある。英語が母国語の英文学教授が、畑功の英文翻訳にどの程度の加筆をしたのかについては不明である。

以上のように著作物を比較検討した結果、在日45年の生涯をかけて圧倒的な数の日本に関する翻訳著書を手掛けてきたF・プリンクリーこそが「修身要領」を翻訳した人物であると考えられる。

3. もう一つの疑問

しかし、この仮説の根拠以外に一つおおきな疑問点がある。それは、どちらが先に翻訳したのか、という問題である。『慶應義塾百年史』には、畑功訳は「明治四十年ごろ」に翻訳されたと書かれている。一方、プリンクリー訳が公開されたのは、1910（明治43）年1月1日発行の『英語青年』誌上であった。比較するとプリンクリー訳は作成年月が確定しているが、畑功訳は1907（明治40）年ごろと時期に幅をもたせ、「いわれている」と伝聞表現である。また、「最初は一枚に印刷されたが、大正12年慶應義塾出版局から小冊子として初版を出し」と書かれ、最初の印刷年月も不明である。

ところで、今回の研究調査では、慶應義塾の出版物で「修身要領」英訳掲載のもっとも早い出版物は『慶應義塾學報』第150号、1910年1月15日発行で、英訳は巻頭6ページを飾っている。プリンクリー訳の掲載された『英語青年』とは同年同月の発行だが、日付がわずか半月、『學報』のほうが遅い。これ以前の『學報』に英訳の掲載誌をさがしたが、みつからなかった。これらの点から考察すれば、「修身要領」英訳の初出誌である、との推定が可能である。しかし、同誌に英文を掲

載する説明、序文、編集後記などがなく、確定するにはむずかしい。では、これが畑功の翻訳によるものか、といえば、『慶應百年史』のあいまいな表現を肯定するかのように翻訳者は記名されていない。他の英文掲載書、『福澤文選』、*Fukuzawa Yukiti on Education* にも翻訳者名の記載はない。

だが、『慶應義塾學報』第150号には、畑功の翻訳した「人格と大学教授」(バウトイン、カーレッジ校長・ハイド著)が5ページにわたって掲載されていた。この訳書は次の151号に後編6ページが載る長編である。にもかかわらず、同誌「修身要領」英訳に「訳・畑功」の記名はない。

畑功が亡くなるのは1956(昭和31)年。畑生前の1937(昭和12)年発行の『福澤文選』に翻訳者の名前はなく、翻訳者として名前を出されるのは死後4年たった1960(昭和35)年発行『慶應百年史』の中である。あるいは生前の畑功は、まさか自分が後世に「修身要領」翻訳という福沢門下生にとって光栄極まりない仕事の当事者になっているとは、思いもよらなかったのではないか。

「修身要領」英訳の初出と思われる『學報』第150号に、畑功が名を連ねながら英語翻訳者の記名がないのも、畑死後に突然伝聞形式で英訳者と書かれるのも、不自然に思われてならない。

腑に落ちないことはもう一つある、それは仮りに畑功の翻訳が先だったら、『英語青年』のプリンクリー訳掲載について抗議してしかるべきではないだろうか。『英語青年』は当時、英語・英文学研究者にとって権威ある専門誌であった。そこに自分の翻訳と酷似する英訳文が登場したら、学者としては無視できない事態ではないか。「修身要領」のプリンクリー英訳掲載に関する畑功または慶應義塾からの抗議、もしくは『英語青年』の謝罪・訂正文を同誌に探した。プリンクリー訳が掲載された1910(明治43)年1月から翌年12月まで、第22巻と第23巻のすべてのページを繰り、社告、読者投稿、雑録などの欄にも目を通したが、見当たらなかった。また、知名度のある人間が盗作をしたとなれば、その人間の信用は地に落ち、社会的制裁を受けるものと思われるが、その後もプリンクリーに対する『英語青年』の信頼は厚く信用失墜の気配すらない。2年後の1912(大正元)年10月28日の死去に際しては、危篤を知らせる第8巻第3号(11月1日)に始まり、訃報の第4号(11月15日)、5、6、8号と連続して記事を書き、深い哀悼の意を表している。

第4号の「片々録」欄には「どの新聞も言はず、又誰も気づかぬ様だが、吾人はプリンクリ氏に幾多の人材を養成したことを特に紹介せねばならぬと思ふ」として以下のように記される。

今の珍田米國大使もプリンクリ氏に知られ盛にメールに寄書して居た。和蘭公使をした三橋信方氏、Japan Times 社長頭本元貞氏、本誌の武信主筆、故佐々木文美氏など何れもプリンクリ氏の translator として働き英文記者に養成させられた者である⁶⁸。(p.127)

頭本元貞は第8号(1913年1月15日)に「先生は又非常の文章家で日本に來た英米人の中、これほどの文章家はない」(p.255)と追悼文を寄せた。これは、プリンクリーの記事についてデニングが書いた「日本の歴史や習慣、思考様式、芸術、伝統、政治、文学に関する彼の記事は、非常に優

れた文体で書かれ、魅力的なだけでなく、ためになるものだった⁶⁹⁾と重なる感想である。

実力、実績、人間性、社会的地位など何一つとっても、プリンクリーが他人の翻訳文を自分のものとして装う必然性がなく、また痕跡もみつからないのである。

さて、話をもとに戻し、『英語青年』のプリンクリー訳掲載の序文を、慶應義塾がプリンクリーに“依頼”したと解釈したこと(本稿 p.2)を再考してみたい。「修身要領」英訳を掲載した『英語青年』と『慶應義塾學報』がわずか15日の違いで発行されたことは、序文の解釈が正しかったといえると思う。すなわち、慶應義塾はプリンクリーに翻訳を依頼したのである。さらに著作権意識の低かった時代性を勘案すれば、慶應は翻訳料を支払い、それを著作権も買い取ったと誤解したとの推測も成り立つ。そのため、著作権者である翻訳者の名前を記さなかったのではなからうか。

IV 博覧会への出品・展示の記録

1. 慶應義塾の日英博覧会出品

『英語青年』序文によれば、「修身要領」の英訳は、日英博覧会会場に慶應義塾大学が出品するためのものだったという。では、はたして実際に出品されたのか。2014(平成26)年3月21日、福澤研究センターにたずねたところ、日英博覧会に関する資料も所蔵していない、との返答であった。

1912年(明治45)3月に農商務省から発行された『日英博覧会事務局事務報告(上・下巻)』によれば、日英博覧会後に慶應義塾は早稲田大学ら参加した各学校とならんで教育部門の名誉大賞⁶⁰⁾を授与されている。そして博覧会入場者向けに作られた公式の英文ガイドブックにも同大学紹介記事が載り、「修身要領」の主張がとりあげられている。すなわち「独立」と「自尊」である。

慶應義塾が日英博覧会に出品した記録は、1932(昭和7)年刊の『慶應義塾七十五年史』に「博覧會出品」の見出しで以下のように掲載されている。

明治四十二年十二月、義塾では其現況を寫眞及び書籍に記して英國に催された日英博覧會へ出品した。寫眞は福澤先生肖像、講堂外景、演説館内部、物理學教室、幼稚舎の授業、中隊教練、柔道道場、野球グラウンド、圖書館模型の九葉で、これを額面に仕立て、又書籍は義塾の歴史及び現況を英文に記せる慶應義塾總攬ともいふべきものと、澤木四万吉、金子壽雄、佐藤俊輔、田中萃一郎、四氏の英文を収録したものの二冊で、これはいづれもタイプライターで印刷し總皮金縁の製本とし、別に英文の福澤先生傳記一部を添へ、以上十二點を文部省の手を経て英國に送附した。(p.232)

また、2011年に復刻発行された『日英博覧会(1910)―公式史料と関連文献集成(1―7巻)』⁶¹⁾にも、慶應義塾大学に関する2つの記事がみられる。まず、5巻では、「大日本帝国教育勅語」の全文を巻頭においた「日本の教育」の章で、慶應義塾が早稲田大学とともに私立大学として登場し、「慶應義塾は“三田の賢人”として有名な教育者福沢諭吉によって1868年に創立された。(略)彼

の道德教育は、「独立」と「自尊」の二つの文字が具現している。それは学生の精神に慣習と規律を決定するモットーである』⁶⁹と紹介される。

次いで6巻の「今日の日本」では、「慶應義塾の歴史」という題で、福沢諭吉の肖像写真および校舎の写真も掲載された記事のなかに、「慶應の校風は、創立者福沢諭吉によってまかれた種から弾けて成長するにはプライドを獲得することである。そのための慶應の道德教育は、信条とする「独立」と「自尊」の二つの言葉のなかに含まれている』⁶⁹と紹介される。

したがって前述の『英語青年』序文にあるように、「修身要領」翻訳は、博覧会場に出品された可能性がきわめて高いと類推できる。しかし、『慶應義塾七十五年史』の記述には、「修身要領」も畑功の名前も書かれていない。そこで、日英博覧会の出品目録から、「修身要領」の英訳文が記載されているかどうかを調べた。しかし、見当たらなかった。出品目録は主に美術工芸⁶⁴、産業物産、芸能などに限られている。教育関係のリストが作成されたのかどうかも不明である。日英博覧会開催の担当は農商務省であり、通商・貿易促進の色濃い博覧会であり、販売促進につながらない教育展示の出品に関してはカタログをつくらなかった形跡がうかがえる。

たとえば『日英博覧会事務局事務報告』「第二十五章 印刷物の発行」に、「本展覧会の出品目録および案内記は開会の際、英国側と協力して第一版を編集して、これを販売せしめたりしが、開会後に至り、さらに校訂を加え再版を発行せり。当初我事務局においては日本部出品のみの目録を別に編簿する予定なりしも、右再版により完全なるを認めたるをもって、これを中止せり」(下巻, p.947)とある。日英共同の英文による目録とガイドブックがつくられたので、日本の出品のみの目録作成を中止したというのだ。日本語の目録を制作せず、英語版だけで済ますという解釈もできる。実際、日本語の目録を探しだすことはできなかった。もっともロンドンにおける博覧会の入場者は英国人が圧倒的多数であり、日本語の目録やガイドブック発行の意義などあるはずもなかった。

2. 日本館の会場と陳列物

日英博覧会会場のホワイト・シティの敷地面積は140エーカー(約168,000坪)という広大なもので、出品陳列館は20館で総面積21,670坪であった。日本は出品部を20館(palace)のうち9館、3館を売店にあてた。陳列館9館の名称は以下に記す。

①日本工業館(Japanese Industrial Palace)2号館、日本園芸館(Japanese Horticultural Hall)2号館A ②日本景色館(Japanese Scenic Hall)3号館、3号館A ③日本歴史館(Japanese Historical Palace)12号館 ④日本織物館(Japanese textile palace)13号館 ⑤日本富源館(Japanese Palace of Natural Resource)21号館 ⑥東洋館(Palace of Orient)23号館 ⑦日本政府各省出品館(Japanese Government Departments)24号館 ⑧日本美術館⁶⁵(Palace of Japanese & British Fine Art's)26号館 ⑨日本婦人製作品、教育、山林、美術工芸館(Palace of Japanese Women's Work, Forestry, Education, Arts and Crafts)47号館

以上9館に40部門の展示品がふりわけられたが、この数だけでイギリスの2倍にのぼる⁶⁴。ほかに5,670坪の日本庭園、柔術や相撲の会場、台湾村やアイヌ村、日本の手工芸技術の実演販売をする日本人街（Fair Japan）、農村風景を再現した宇治村（Poetic Japan）などが設けられた⁶⁵。台湾やアイヌの村落モデル展示には、当時の植民地、台湾のパイワン族、そしてアイヌ民族を連れて行って、実際に村落で寝泊まりさせ日常生活を見せた。のちにこれが人間動物園と非難され、日英博覧会が失敗であったと評される最大の原因となった。また、相撲や演芸など見世物も、裸体をさらすのは野蛮な後進国のイメージを与えると、在英日本人などから顰蹙を買った⁶⁶。ちなみに大いなる評判を得たのは日本庭園と、国宝クラスの高美術品をはじめとする美術・工芸品であった。

3. 「教育」部門の展示館

陳列館の展示品内容を見ると、慶應義塾大学の属する「教育」部門は47号館に出品されている。教育部門出品に関する記述を『日英博覧会事務局事務報告』にさがすと、「教育（指定学校以外官庁の出品ありしも、分類上便宜ならびに併記す）」⁶⁷と出品許可の条件を以下のように定めている。

一、国体を説明するもの、一、武士道の発達を示せるもの、一、学校、図書館および社会教育の沿革を示せるもの、一、著述出版等の沿革を示せるもの、一、文学、史学、哲学、理学の発達を示せるもの、一、西洋文物の伝来および発達をしめせるもの、一、教育の組織に関する図書統計表、

「修身要領」は「哲学の発達を示せるもの」が一番合うように思われるが、推論の域を出ない。

ところで、「修身要領」英訳が出品されていれば47号館に展示されたと思像されるが、同館は博覧会場内でもっとも広い1,599坪の陳列館である。同館に展示された出展品の例をあげよう。たとえば、「普通商品」として、陶磁器、漆器、金銀銅などの箔、玩具、医療・理化学、製図等の諸機器、楽器、出版物など、運動具、乳母車、草履など。「指定出品」として教育、山林狩猟、商務局、工務局、東京市および大阪市。「婦人出品」として婦人著書、儀式用衣服、遊戯物、茶道具、化粧品など。「自営出品」として日本郵船、三菱合資会社、帝国製帽、日本楽器製造、審美書院など。

このうち教育関係は、「公私の諸学校の教育出品物、中初等教育および中程度に属する児童生徒の成績写真等」が展示された、と公式史料に記載されている（下巻 p.21）。慶應義塾が出品したなかに「修身要領」英訳が含まれていたならば、まちがいなく47号館に展示されたと、この記述より類推された。47号館の展示風景を紹介した『日英博覧会公式史料』3巻⁶⁸の「産業と教育の変化にとんだ日本館」の章には、教育部門の展示風景写真数点が掲載されている。慶應義塾の展示写真載っていないが、「修身要領」英訳も、ガラスで囲った陳列棚や壁面に展示されたものではなかったか。

おわりに

鎖国を解いて43年。脱亜入欧を国策とする日本にとって日英博覧会開催は、一等国として世界に認めてもらう絶好の機会であった。そのために産業・技術力や軍事力と同時に教育・芸術など文化面の紹介にも力を惜しまなかった。なかでも新道徳である「修身要領」英訳文の出品は、封建思想を脱却し、個人の人権尊重の近代思想をもつ国になったと先進西欧諸国に披露する狙いがあったと推察される。日本びいきのプリンクラーがその趣旨に賛同したことは想像にかたくない。渡辺俊一は、「福沢諭吉とプリンクラー―「開鎖論」を中心に」でプリンクラーについて次のように語る。

たとえば、福沢が真剣に希望した『民情一新』の英訳刊行も、適切な翻訳者が得られずに実現しなかった。福沢の文章を多く翻訳していたプリンクラーこそが、唯一の適任者であった。依頼されれば、東西文化の橋渡し役を自己の使命としていたプリンクラーはおそらく引き受けたであろう。(p.46)

渡辺が福沢の翻訳者として「唯一の適任者」と断言する背景には、プリンクラーの日本語力に対する強い信頼が横たわっている。来日以来、熱心に日本語習得につとめたプリンクラーは、在留外国人のなかで最もよく日本語を理解するといわれたほどである。言語学者のチェンバレン教授⁶¹⁾でさえも日本語についての「プリンクラーの優れた能力にびっくり仰天させられ」、「この点についてプリンクラーの域に達した外国人は他にいない」という見解を示していた⁶²⁾。

その語学力をもって、プリンクラーは和英辞典をはじめ多くの著作を出版してきたのである。

前述のような膨大な著作を発表するほどに日本の歴史と伝統を学び、優れた美術工芸を愛して、日本人のものの見方・考え方を深く理解するプリンクラーは、渡辺俊一ならずとも福沢の『民情一新』の英訳の最適任者であったと思わざるを得ない。また、「東西文化の橋渡し役を自己の使命としていたプリンクラーはおそらく引き受けたであろう」の文にも同感させられる。

日英博覧会が開催されたのは福沢諭吉の没後9年目。確執をそのままに一昔の歳月が流れていた。かつて「思想家福沢を高く評価して、『メイル』紙上に数多く福沢の文章を翻訳掲載して紹介していた」⁶³⁾プリンクラーは、「修身要領」をどんな感慨をもって英訳したのだろうか。

プリンクラーは、母国イギリスに日本を紹介する日英博覧会に、『タイムズ（日本特集号）』の執筆と「修身要領」英訳の2つの仕事を手がけた。それは、ジャーナリストおよびジャパノロジストの実力を存分に発揮して、プリンクラーの晩年をかざる実り多い仕事となった。

翻って明治日本にとっては、国の威信をかけて開いた日英博覧会における新道徳律「独立自尊」の披瀝は、封建的思想からの脱却と近代思想の獲得を同時にアピールすることであり、欧米列強と肩を並べる一等国の実現へと歩を進める役を果たしたといえるだろう。

FUKUZAWA'S MORAL CODE.

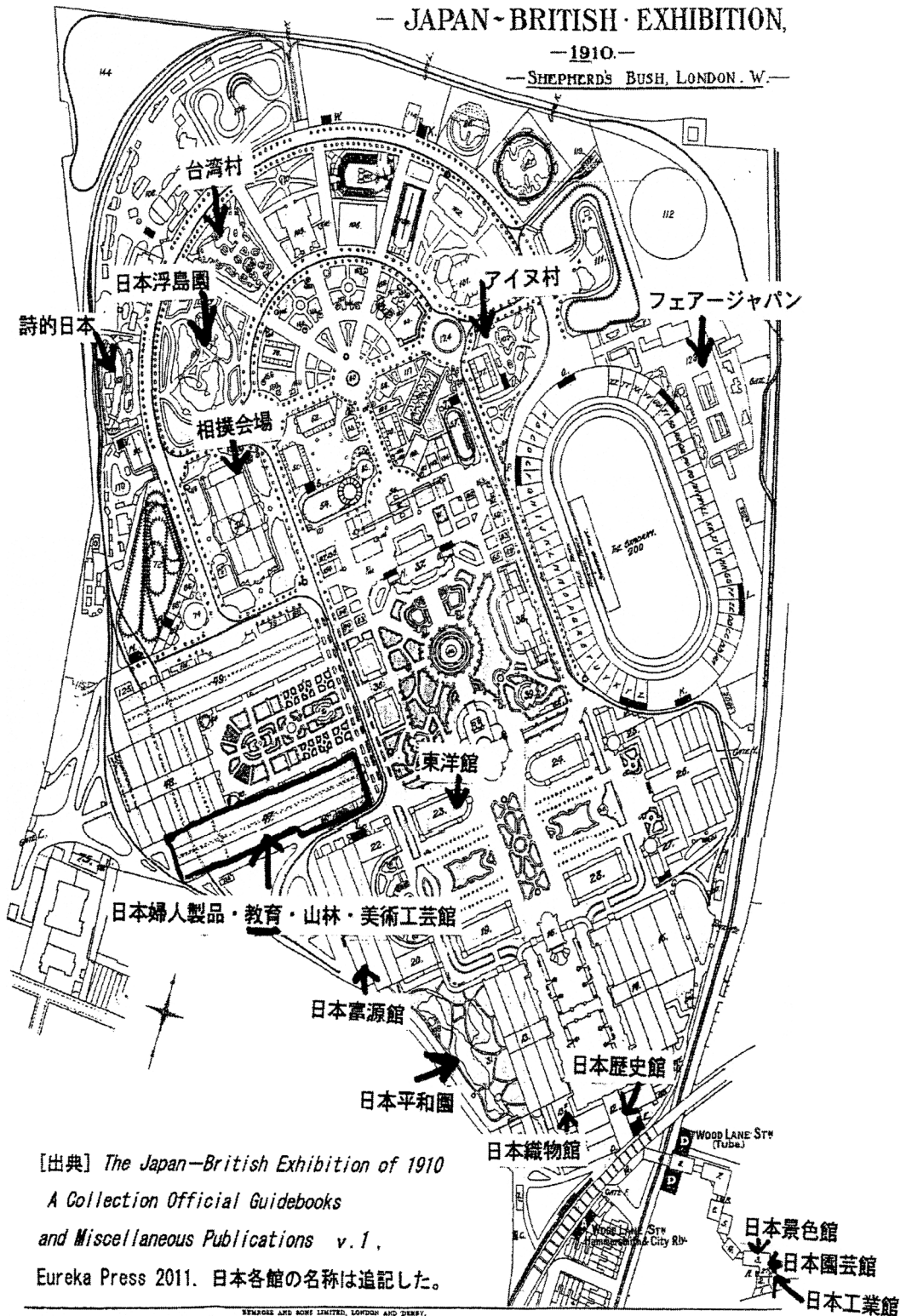
Translated by Captain Brinkley.

It is a point about which there is a perfect unanimity of opinion throughout the realm, that it is incumbent upon every native-born subject of the Japanese Empire, without regard to age or sex, to pay homage to the Imperial House that has reigned throughout the ages and to show gratitude for its gracious favour that has accrued to us from its many virtues. But when we ask the question how, in these days, and in what manner, the men and women of to-day should order their conduct in society, we find that as a rule such conduct is regulated by various systems of moral teachings which have been handed down from past ages. It is fitting, however, that moral teachings should be modified from time to time to keep pace with the progress of civilization, and it is but natural that a highly advanced and ever advancing society, such as we find in the world to-day should be provided with a system of morals better suited to its needs than the antiquated teachings already mentioned. It is for this reason, we venture to think, that it has become necessary to state anew the principles of morals and rules of conduct, individual as well as social.

1. It is the universal duty of man to raise his personal dignity and to develop his moral and intellectual faculties to their utmost capacity, never to be contented with the degree of development already attained, but ever to press forward to higher attainments. We urge it, therefore, as a duty upon all those who hold the same convictions as ourselves to endeavour in all things to discharge their full duty as men, laying to heart the principles of independence and self-respect, as the leading tenets of moral life.
2. Whosoever perfectly realizes the principle of independence, both of mind and body, and paying due respect to his own person, preserves his dignity unblemished, —him we call a man of independence and self-respect.
3. The true source of independence of life is to eat one's bread in the sweat of one's brow. A man of independence and self-respect should be a self-helping and self-supporting man.
4. Strength of body and soundness of health are requisites of life. We should, therefore, always take care to keep mind and body active and well, and to refrain from any action or course of life likely to prove injurious to our health.
5. It is man's duty to live out the whole of his allotted span of life. To take one's own life, for whatever reason, or under whatever circumstances, is an unreasonable and cowardly act, altogether abominable and entirely unworthy of the principle of independence and self-respect.

*紙幅の関係上、5条までを掲載。

[資料2・日英博覧会会場地図]



【注記】

- ⁽¹⁾ アイルランド生まれ。ダブリンのダンガノン、トリニティの2つのカレッジを卒業。ロンドンの王立士官学校(The Royal Military Academy)卒業後、陸軍砲兵隊に入隊。1867(慶応3)年26歳で陸軍中尉として来日。海軍省御雇、工部大学校教授を経て英字新聞『ジャパン・メール』社主兼主筆、ロンドン発行の『タイムズ』東京通信員として活躍。日英同盟、条約改正などに関わり明治政府の国際外交を陰で支えた。水戸藩士の娘、田中安子(1861—1932)と結婚。二男二女あり。
- ⁽²⁾ 1898(明治31)—2013(平成25)年。英語学、英米文学、英語教育などの研究者向け月刊誌(週刊、隔週刊、月2回発行の時期もあり)。ジャパン・タイムズ、英語青年社、研究社と発行所が替り、2009年4月にウェブページに引き継がれたが、2013年9月に終刊。
- ⁽³⁾ 『英語青年』第22巻第7号(1910年1月1日)p.159。
- ⁽⁴⁾ 『明治大学大学院教養デザイン研究論集第9号』2016年2月, pp.1-20。
- ⁽⁵⁾ 「彼〔プリンクリー〕は約7年前〔1905年〕から中風を患っていた」(*The Japan Weekly Mail*, Nov.2, 1912, p.515/頁数は年間の通頁)。「プリンクリーは長い間パーキンソンによる麻痺に悩まされていた」(*The Japan Times*, Oct.29, 1912, p.1)
- ⁽⁶⁾ 『福澤論吉年鑑24』福沢論吉協会, 1997年, pp.25-52。同名論文「一その二」『同左25』同協会, 1998年, pp.61-85。
- ⁽⁷⁾ 明治14年の政変とは、国会開設、憲法制定をめぐる大隈重信派と伊藤博文、井上毅らの意見の対立、および同時期に生じた北海道開拓使官物払下げ事件をさし、伊藤ら薩長派が大隈、福沢論吉らに政府陰謀があったという口実で大隈一派を追放したもの。以後、薩長藩閥政権が確立される契機になった明治史上の画期的な政治事件であった。
- ⁽⁸⁾ 『年報・近代日本研究・18 比較の中の近代日本思想』山川出版社, 1996年, pp.134-168。
- ⁽⁹⁾ 「福沢論吉とプリンクリー——「開鎖論」を中心に」p.26。
- ⁽⁹⁾ プリンクリーと福沢論吉は宗教論、条約改正、日本女性論などに対し意見の合致と乖離を繰り返し、互いへの好意と反発・敵意をもちあった。二人の関係性の変遷は渡辺俊一の論文に詳しいので紙幅の都合上、これらの叙述については委ねたい。
- ⁽¹⁰⁾ <1, 社会の一員, 2, 文筆家, 3, 新聞の編集者および記者, 4, 日本研究者, 5, 美術品鑑定家>と5章に分け詳細に記述(翻訳協力・坂元理人)。親日的な『メール』、反日的な『クロニクル』と両紙の編集方針は正反対。『クロニクル』社主ロバート・ヤングは、『メール』社主プリンクリーを嫌っているとの世評だったが、この丁寧な追悼記事はそれを一蹴した。
- ⁽¹¹⁾ 昭和女子大学近代文学研究室(五十嵐睦子・山本美保子)『近代文学研究叢書』第13巻。昭和女子大学光葉会, 1959年。以下、<昭和女子大「F・プリンクリ」>と表記。同書に『『ジャパン・クロニクル』明治45年(1912年)10月30日付の紙面にデニング(Walter Dening)によるプリンクリの伝記が載っている』(p.319)と記載されている。
- ⁽¹²⁾ *Who's Who* (英国紳士録)によれば、プリンクリーが『ジャパン・メール』を買収したのは1881(明治14)年。死去した1912(大正元)年10月までの31年間経営にあたった。
- ⁽¹³⁾ 『福澤文選』(富田正文・岩崎友愛編)慶應義塾出版局, 1938年, p.1, 要約。
- ⁽¹⁴⁾ 北岡伸一『独立自尊』講談社, 2002年, p.327。
- ⁽¹⁵⁾ 1840(天保11)—1931(昭和6)年。埼玉県深谷の豪農の生まれ。幕府、のちに大蔵省に出仕。辞職後、銀行・製紙・紡績・保険・運輸・鉄道など多くの企業の設立に関与する。
- ⁽¹⁶⁾ 『渋沢栄一全集 第3巻』平凡社, 1930年, p.280。
- ⁽¹⁷⁾ 「日本の議会は雄弁誇示の舞台ではなく、法律事務所になってしまった」「それにしても日本の政治状況は独特だ。議会制度を採り入れたのはよいが、彼らはそれを自分たちの好みに合うように改造してしまった」(*The Times*, Jul.19, 1910, 「Parliamentary Institutions-The Work of The Diet」)
- ⁽¹⁸⁾ 「偉大な祖先、神武が侵略軍を率い、今もって謎とされている外海域から日本に到達したのは紀元前660年のことである」(*The Times*, Jul.19, 1910, 「The Dynasty-The Sovereign and The Imperial Family」p.50)。また、*A History of the Japanese People* (日本民族史)のvol.4 Rationalization (合理的思考)(pp.28-33)では、

神話と歴史、黒潮など地理的条件を検証、日本人の始祖を台湾、フィリピンなど他から渡来してきたと示唆する。日本人は神話以来の神の子孫であるとする当時の日本のタブーの領域に踏み込んだ内容である。

- ²⁰⁾ 「高潔さや誠実さ、思いやりがある、自己犠牲的・愛国的武士道精神、子供への深い愛情、冷静沈着」(*The Times*, Jul.19, 1910, 「Japanese Characteristics」 p.66要約)などと日本人を評価している。
- ²¹⁾ 「慶応3年、上陸した長崎郊外で父〔F・プリנקリー〕は二人の武士の果し合いに遭遇する。勝った武士が負けた武士の切断された片腕を死体となった切り口に当て、乱れた衣服を整えたのち自分の羽織を脱いで彼を覆い、丁寧に合掌してから静かに立ち去った。この事件を見届けた父の驚きは激しいものであった。態度の寛大、優美、大和魂の発露をここに見出した(略)父の日本人観の根底をなす一部がこのとき出来上がったのである」(次男・ジャック・プリנקリー「フランシス・プリנקリーと明治時代」、『丸』第1号第8号、潮書房光人社、1912年10月、p.73、要約)
- ²²⁾ *The Times*, Oct.29, 1912, p.9. *The Japan Chronicle*, Oct.30, 1912, p.5.
- ²³⁾ 『慶應義塾百年史』(中巻・前)慶應義塾大学出版会、1958年、p.474.
- ²⁴⁾ 『慶應義塾學報』第150号、1910年1月15日、慶應義塾學報發行所、pp.1-6.
- ²⁵⁾ 注(14)に同じ。
- ²⁶⁾ Eiich Kiyooka (Translated and Edited), University of Tokyo Press, 1985. すなわち標題は、清岡英一「慶應義塾大学名誉教授、福沢諭吉の孫」の翻訳・編集。「修身要領」英訳の出典は『『福澤諭吉全集』(21巻) pp.353-56』と記す。
- ²⁷⁾ 『慶應義塾百年史』(別巻・大学編)慶應義塾、1962年、p.100.
- ²⁸⁾ 1956(昭和31)年11月27日付け、朝日新聞(p.9)、読売新聞(p.5)の訃報欄。肩書は朝日が「慶大名誉教授」、読売が「元慶大ラグビー部長」。
- ²⁹⁾ 『人事興信録』(第14版・下巻)人事興信所、1943年、pp.(ハ)45-46。宮本與作「畑先生會見記」、『時事英語研究』1955年4月号、研究社出版、pp.46-47。『ふるさと人物記』夕刊フクニチ新聞社、1956年、p.630。厨川文夫「畑功先生を想う」、『英語青年』1957年2月1日号、p.88。『豊津町誌』豊津町、1985年、p.1025。
- ³⁰⁾ 『慶應義塾總覽一昭和十七年度』慶應義塾、1943年、p.145.
- ³¹⁾ 注(27)に同じ。P.87.
- ³²⁾ (第9巻第2号)、三田文學會、1918年2月1日、pp.112-138。翌3月号、pp.121-126。にも1編の掲載がある。
- ³³⁾ *The Japan Weekly Mail*, Nov.2, 1912, p.515.
- ³⁴⁾ *Guide to English Self-Taught* (印書局、1875年)は、日本初のフレーズ式和英辞典。「文章は簡潔明快であるが、その英文法解説は懇切丁寧に詳細である」(長谷川潔「francis Brinkleyの『語學獨案内』」(『関東学院大学文学部紀要』第77号、1996、p.83)。「英文書のベストセラーになり、次男のジャックの話では、坪内逍遙や伊藤博文など著名人にも愛用者が多かった」(昭和女子大「F・プリנקリー」、p.310)
- ³⁵⁾ *An Unabridged Japanese-English Dictionary* (三省堂書店、1896年)は、1867ページの大書で、明治の和英辞典としてはおそらく最も広く用いられ、日本語学習の欧米人にも大いに重宝がられた。この書が出版されると、「1867年(慶応3年)の初版以来版を重ねてきたヘボンの『和英語林集成』の売れ行きが急速に落ち込んだことから、いかに時勢の要求に適応したかが推察できる」(長森清「F・Brinkleyの『語學獨案内』と『和英大辞典』—英語教育史における意義」、『異文化研究』6、文化書房博文社、2009年、p.102)
- ³⁶⁾ *New Guide to English Self-Taught*, 三省堂書店、1909年。
- ³⁷⁾ *Japan: Described and Illustrated by the Japanese written by eminent Japanese Authorities and Scholars*, Boston Mass USA, J・B・Millet Company, 1897-98.
- ³⁸⁾ *Japan and China: Its History, Art and Literature*, (日本8巻、中国4巻) Boston Mass USA, J・B・Millet Company, 1901-02.
- ³⁹⁾ *The History of China and Japan. Chap.III, IV, V and Appendix A, The Historian's History of the World* (歴史家の歴史), vol.24 Book V, London, Times, 1908.
- ⁴⁰⁾ Capt. F. Brinkley, Baron Kikuchi, *A History of the Japanese People: from the Earliest Times to with the End of the Meiji Era (The Historian's History of the World)*, The Encyclopaedia Britannica co, 1914.

- ⁽⁴⁰⁾ 「彼が特に学び、日本、ヨーロッパ、アメリカにおいて権威であると認められていたテーマは、日本の歴史、日本と中国の美術、日本の政治、そして日本語であった。(略) 彼は日本語の学習を1868年に始め、70年代には細心の注意を払って日本語に取り組んでいた。(略) 彼は日本の主導的政治家や学者と何度も談話し、参照資料として多くの優れた日本語著作物を集めていた。(略) キャップテン・プリンクリーのこのような言語研究へのたゆまぬ努力が、外部世界に対する日本語解説者という重要な役割を成功させたと私には思われる」(Walter Dening, *The Japan Weekly Mail*, Nov.2, 1912, p.515.)
- ⁽⁴²⁾ 明治書房、1937年。随筆4編と、自作の英語劇3本、新体詩6編、40教編の漢詩で構成されている。「畑功氏著『變物集』を読む」(『三田評論』第480号、1937年)を書いた松岡惣太郎は、畑について「其人の風貌を懐想するとき何かフンワリとした温かい感じを持つてであろう。(略) 随筆といふものは、最もよく著者の人柄を表すものである」と記している。
- ⁽⁴³⁾ 畑功編の *English Stories* (vol.3) と *English Essays* (vol.3), 慶應義塾出版局。W. S. Vines と畑功の共著 *A Guide to Colloquial English with Phonetic Notation* Maruzen, 1927年。畑功著 *The Master of Ballantrae* (Robert I. Stevenson 原著) 春陽堂教育圖書出版部, 1931年。畑功編 *English Texts* (vol.2) 慶應義塾出版局, 1935年。畑功編 *The Gold-Bug & Olalla* (Edgar Allan Poe, Robert Louis Stevenson 原著) 慶應義塾出版局, 1939年。畑功編 *The Picture of Dorian Gray* (Oscar Wilde 原著) 慶應義塾出版局, 1940年。
- ⁽⁴⁴⁾ 「ミルトン(畑功氏談)」, 『英語青年』(第20巻第6号) 1908年12月15日, 英語青年社, p.138。「人格と大學教授」(米国カーレッジ校長ハイド著・畑功訳), 『慶應義塾學報』150—151号, 慶應義塾學報発行所, 1910年1月—2月。「羅馬と千人力(西洋史談)」, 『少年』(第160号) 1月, 時事新報社, 1917年, pp.2-8。「故高橋一知先生に就て」, 『英語青年』(第65巻第10号) 1931年8月15日, p.351。「社会教育主事講習の問題点—「資格」と受講者について」, 『月刊社会教育』8月, 国土社, 1962年, pp.77-80。
- ⁽⁴⁵⁾ 『時事英語研究』研究社出版, 1955年4月, pp.46-47。
- ⁽⁴⁶⁾ 『英語青年』(第103巻第2号) 英語青年社, 1957年2月10日, p.88。
- ⁽⁴⁷⁾ 注(23)と同じ。P.662。
- ⁽⁴⁸⁾ 珍田米國大使は珍田捨巳(1857—1929), 津軽藩出身の外交官。米国留学後, 外務省入省。ブラジル, ロシアらの公使, ドイツ大使など。1919年パリ講和会議に出席。伯爵。侍従長。三橋信方(1856—1910)は江戸生まれ。工部省に出仕, のちに神奈川県参事官, 外務大臣秘書官を経て, 1901年オランダ公使兼デンマーク公使。退官後, 横浜市長(5代)。頭本元貞(1863—1943)は鳥取県出身のジャーナリスト, 政治家。武信主筆こと武信由太郎(1863—1930)『英語青年』主筆と同郷で, 愛知英語学校, 札幌農学校の同期生。頭本は農学校卒業後ジャパン・メール社に入社, 翻訳記者になる。伊藤博文の秘書官。渋沢栄一の信頼を得て国際的に活躍し, 1897年日本初の日本人による英字新聞『ジャパン・タイムズ』を創刊。衆議院議員。武信は中学校教師を経て, 頭本の後釜として1887年ジャパン・メール社に入社。のちに頭本とともに『ジャパン・タイムズ』創刊に携わる。『英語青年』『英語世界』を主宰。1905年早稲田大学教授。『武信和英辞典』(研究社, 1918)を編纂。佐々木文美(1855—1909)は珍田と同郷。当時津軽藩の英語教師だった林薫伯爵に学び, 藩より抜擢されて開成学校入学。卒業後は東京英語学校, 愛知英語学校にて教鞭をとり, 外務省翻訳局入局。1892年ジャパン・メール社に入社。新聞記者の激務から体をこわし, 退社。村井商会の翻訳主任, 1903年より国民英学会を経て山口高等学校教授。
- ⁽⁴⁹⁾ *The Japan Chronicle*, Oct.30, 1912, p.5.
- ⁽⁵⁰⁾ 名誉大賞は181の出品人に贈られ, そのうち教育関係は42の出品人であった。
- ⁽⁵¹⁾ *The Japan-British exhibition of 1910: a collection of official guidebooks and miscellaneous publications* (日英博覧会(1910)—公式史料と関連集成), 「別冊 日本語解説」付。松村昌家・監修・解説, ユーリカ・プレス, 2011年復刻。以下『日英博覧会公式史料』と表記。
- ⁽⁵²⁾ 『日英博覧会公式史料』vol.5「A Japan Alliance Exhibitional: to promote Anglo-Japanese commerce (1910)」, p.154.
- ⁽⁵³⁾ 『日英博覧会公式史料』Vol.6「Japan to-day: a souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910」, p.127.
- ⁽⁵⁴⁾ 「An Illustrated Catalogue of Japanese Old Fine Arts displayed at the Japan-British Exhibition, London 1910」

は、『日英博覧会公式史料』vol.2に収録。

- ⁶⁹ 英文表記に「British」があるように、同館では日英双方の美術品が展示された。英文に則り「日英美術館」とも訳すが、ここでは日本語表記は農商務省の正式表記を引用した。
- ⁷⁰ 『日英博覧会公式史料』の「別冊日本語解説」p.12。
- ⁷¹ 日本人街は21軒の日本家屋群で、陶器製造、象牙や七宝の細工、彫刻、造花、刺繍、菓子製造、その他の手工芸を実演販売した。宇治村には8軒の日本家屋と水車がつくられ、藁葺きの家の中で、桶、鍛冶、機織り、縄などの実演が行われた（山路勝彦「日英博覧会と「人間動物園」」、『関西学院大学社会学紀要』第108号、2009年10月、pp.17-23参照）。
- ⁷² 教育学者・藤原喜代蔵は、読売新聞1910年6月に「日英博覧会」の題名で4回連載。「建築物は広壮にして贅多なれども、其の過半は空虚なり」と展示内容の貧小さを手厳しく批判する。英国の出品物はことごとく二流、日本の出品物は古美術や歴史風俗など一部の展示を除いては、「多くは『外国向き』の俗悪の制作物」と断言し、盛況なのは「ただ珍奇なるが故、(略)余り有難くもなき次第なり」と冷ややかである。また、貴族院議員・室田義文の子息、小一郎は「国辱の博覧会」の題で都新聞（1910年7月23日—24日）に寄稿。「日英博覧会の余興は始めよりないほうが可い。(略)外国人間の物笑いとなっております」と嘆く。「半裸体に鎌を担ぎ、田を耕して見せるのや、独楽回しが掛小屋でクドクド言っておるのは我々日本人は冷汗が流れる」（23日）。「日英博覧会で日本を善く紹介したかは疑問です」（24日）と指摘した。
- ⁷³ 上巻「第七章 日本部の出品」「第六節 指定出品」p.278。
- ⁷⁴ 『日英博覧会公式史料』vol.3「Official Report of The Japan British Exhibition 1910」
- ⁷⁵ Basil Hall Chamberlain (1850—1935) イギリスの日本学者。1873年来日。86—90年、帝国大学（現東大）教師。博言学（言語学）を講じる。1911年日本を去り、ジュネーブに隠棲。
- ⁷⁶ *The Japan Weekly Mail*, Nov.2, 1912, p515. デニングはまた、ヒストリカスというペンネームを使い、プリンクリーの日本語への理解が優れていた理由の一例を『ジャパン・クロニクル』（1912年10月30日、P.5）に紹介している。その内容は、プリンクリーは日本語を英訳するにあたって多忙なときには、日本人アシスタントに日本の記事を読ませたり、記事の内容を伝えさせたというもの。「彼の日本語の知識は、伝えられた意味をすばやく英語で書き留められるほどに優れたものであった。メモに新聞記事を書くには、その土地の言葉で書かれた新聞から抜粋した事実や、学術的で信頼のおける日本人の意見に頼ることがもっとも迅速で確かな方法である。英語を話すアシスタントでは危険が伴い、誤りを犯すことになりかねない。キャプテン・プリンクリーが何年もの間雇いつづけていたのは、自国語しか話さない男だった」
- ⁷⁷ 「明治十四年政変再考—井上毅と福沢諭吉」p.135。

【参考文献】

- ・『英語青年』第22巻第7号—8号（1910年1月1日—1月15日）、英語青年社。
- ・楠元町子「日英博覧会と明治政府の外交戦略」、『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』第38号、2013年。同「日英博覧会における日本の展示」、『同左』第39号、2014年。
- ・『国際ニュース辞典 外国新聞に見る日本④本編・上』毎日コミュニケーションズ、1993年。
- ・白山映子「頭本元貞と太平洋問題調査会」、『近代日本研究』（第25巻）、慶應義塾福沢研究センター、2008年。
- ・頭本元貞『伊藤公と憲法政治』発行・頭本元貞、1932年。
- ・外山敏雄『札幌農学校と英語教育—英学史研究の視点から』思文閣出版、1922年。
- ・『日英博覧会事務局事務報告（上・下巻）』農商務省、1912年。
- ・『福澤諭吉全集』第21巻、岩波書店、1964年。
- ・松岡惣太郎「畑功氏『變物集』を読む」、『三田評論』（第480号）、慶應義塾出版局、1937年8月。
- ・松永智子「〈研究ノート〉創成期の『英語青年』：Japan Times との関連を中心に」、『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』9巻、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、2010年。
- ・山口栄鉄『英人日本学者 チェンバラレンの研究—〈欧文日本学〉より見た再評価』沖積舎、2010年。